様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：２４４０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ１２１４４

研究課題名（和文）看護系大学に所属する若手教員の能力形成・向上に資する教育支援の検討

研究課題名（英文）Educational support provided at nursing universities that contributes to building and enhancing the junior faculty members' competency

研究代表者
土肥　美子（Doi, Yoshiko）

大阪公立大学・大学院看護学研究科　・准教授

研究者番号：１０６３２７４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、若手教員（看護系大学に所属し、看護師免許を持ち、看護系大学での教員経験が3年未満で39歳以下の助教）の能力形成・向上に資する教育支援を検討し、若手教員のFD活動に資する知見を得ることである。本研究で実施した若手教員および上位職教員への質的調査の結果をもとに考案した【若手教員の能力形成・向上支援プログラム（仮称）】について、看護教育学の専門家から評価を得ることができた。また、若手教員の能力に関する量的調査の結果から彼らの能力傾向を把握することができた。よって、本研究の目的を概ね達成することができたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
わが国の社会変化の激しい昨今では様々な状況下においても主体的に健康課題を解決できる看護職の育成が必要とされている。よって、看護系大学に所属する若手教員には、看護大学生が自ら課題を発見し、それを解決するプロセスを構築するまでの学習活動を支えるために、看護大学教員として自らの能力開発に努めることが求められる。このような背景のもと、若手教員の能力形成・向上に資する教育支援の検討で得られた成果は、若手教員にとって有益な教育支援の創出につながることが期待でき、ひいては、若手教員のFD活動の質向上への一助になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines educational support that contributes to the competency development and improvement of junior faculty members (assistant professors aged 39 or younger with less than 3 years of experience as a faculty member at a nursing university who hold a nursing license and are affiliated with a nursing university), and derives insights that contribute to faculty development initiatives for junior faculty members. Regarding a “Competency Development Program for Junior Faculty Members (provisional title)” that has been designed based on the findings from surveys of junior faculty members and their senior counterparts conducted in this study, we were able to obtain an evaluation from specialists in nursing education. Furthermore, the survey findings regarding young faculty competencies allowed for the identification of ability trends, thereby mostly achieving the study objectives.

研究分野：看護教育学

キーワード：若手教員　　能力　　支援プログラム　ファカルティ・デベロップメント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

## １．研究開始当初の背景

（１）本研究に関連する国内・国外の研究および位置づけ：大学教員の教育活動に関する能力の形成・向上をめざす FD の推進とともに、若手教員の育成が重要課題とされている（日本看護系大学協議会，2011)。しかしながら、わが国では、若手教員を対象にした研究は少なく、土肥ら（2012，2015)が行った実態調査が存在するだけで、若手教員を含む看護大学教員(以下、教員)の能力開発について具体的に明文化された文献はほとんど見当たらない。海外では、教員の能力開発のための研究（Davis et al, 1992，2005）が行われており、教員の教育支援の在り方についてすでに検討されている。Holopainen ら（2008）は、社会環境の変化から教員には教育や学生指導に対して多くのスキルを必要とし、教員に求められる能力が複雑化していることを指摘している。わが国においても社会変化の激しい昨今では様々な状況下においても主体的に課題を解決することができる看護職の育成が必要とされている。よって、若手教員には、看護大学生が自ら課題を発見し、それを解決するプロセスを構築するまでの学習活動を支えるために、教員として自らの能力開発に努めることが求められる。このような若手教員の教育ニーズにもとづく教育支援の検討は、若手教員にとって有益な教育支援の創出につながることが期待できる。

（２）これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯：申請者らは、これまで若手教員の能力開発という観点から研究を重ねてきた。各大学が行うFaculty Development（以下FD）が様々であることに着目し、看護系大学に所属する若手教員の能力形成・向上に資する教育支援のための基礎資料を得るため、若手教員の学習ニーズ（土肥ら，2012）や若手教員が求める教育支援（土肥ら，2015）を検討してきた。その結果、若手教員が自らの役割遂行のための学習を必要としており、若手教員にはそれらを考慮した教育支援が必要であるという示唆を得た。看護系大学のFD（Kelly, 2002; Knight, 2004）や海外の教員能力（Johnsen et al, 2002; Davis et al, 2005; Guy et al, 2010）に関する文献的考察からは、各国の看護教育制度や教員が担う社会的役割等が異なることから、海外の教員能力項目をわが国の教員に適用することは難しいと考え、わが国の教員に必要な能力については新たに検討する必要があると考えた。これらをふまえ申請者らは、基盤研究C（課題番号：25463376）において若手教員の能力を測定する目的で看護大学教員能力自己評価尺度（Nursing Faculty Competencies Self-Assessment Scale: NFCSAS）を開発（Doi et al., 2021）し、それを用いて彼らの看護大学教員能力(以下能力)の伸長に影響要因を検討した結果、メンタリング、メタ認知、大学教員経験年数が、若手教員の能力を高め、その結果、自己効力感が向上することが明らかになった。若手教員には能力形成・向上のための教育支援が必要であることが示唆され、若手教員の能力形成・向上に資する教育支援を検討することは、若手教員のFD活動の質向上への一助になると考えた。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、看護系大学に所属する若手教員(看護系大学に所属し、看護職免許を有する看護大学教員経験が 3 年未満で 39 歳以下の助教)の能力形成・向上に資する教育支援の検討を行い、若手教員の FD 活動に寄与する知見を得ることを目指す。

## ３．研究の方法

（１）若手教員の能力形成・向上に資する教育支援の質的検討：対象は便宜的抽出法にて選

出した。調査協力の承諾が得られた若手教員 4 名を対象に、2018 年 3 月、120 分のグループ・インタビューを実施し、若手教員の能力形成・向上に資する教育支援について検討した。得られたデータは質的帰納的に分析した。

（２）若手教員の能力に関する量的調査：全国の看護系大学の学部長または学科長に文書による調査協力の依頼を行い、承諾が得られた大学の若手教員 174 名を対象に郵送法による質問紙調査を実施した。調査内容は NFCSAS、学習ニーズ（土肥，2012)、経験学習尺度（木村ら，2011)、職場学習風土尺度（伊勢坊，2012)、個人属性である。データ収集の期間は 2019 年 3 月～8 月であった。分析は、統計学的手法を用いて若手教員の看護大学教員能力にどのような要因が関連するかを検討した。得られたデータは記述統計量を確認し、NFCSAS の 11 下位尺度を四分位数にて低得点群と高得点群に分け、学習ニーズ得点、経験学習得点、職場学習風土得点を Mann Whitney U 検定で比較した。

（３）上位職教員を対象とした若手教員の能力形成・向上に資する教育支援の質的検討：対象は便宜的抽出法にて選出した。調査協力の承諾が得られた若手教員の指導経験がある６名の上位職教員（教授、准教授、講師、各 2 名）を対象に、2021 年 3 月、120 分のグループ・インタビューを実施し、若手教員の能力形成・向上に資する教育支援について検討した。得られたデータは質的帰納的に分析した。

（４）【若手教員の能力形成・向上支援プログラム（仮称)】を構築するための基礎資料としての評価：若手教員を対象にした調査結果と若手教員の教育支援経験がある上位教職員を対象にした調査結果をもとに考案した【若手教員の能力形成・向上教育支援プログラム（仮称)】の妥当性および適切性について検討するために、便宜的抽出法にて選出した看護教育学の専門家（看護職免許と看護教育学を専門とする博士号（看護学）を有し、大学教員経験が 3 年以上の常勤の教授 1 名、准教授 1 名、講師 2 名）を対象に 2022 年 11 月、120 分のグループ・インタビューを実施した。グループ・インタビューは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため Web 会議システム Zoom を活用した。

なお、全ての調査は所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

## ４．研究成果

（１）若手教員の能力形成・向上に資する教育支援の質的検討：分析の結果、【大学教員の準備性を高める学習の機会の提供】【授業設計のための指導・助言】【自己研鑽の機会の提供】【役割遂行のための環境調整】の 5 カテゴリーが抽出された。若手教員にとって、大学教員としての準備性を高める学習の機会、教育デザインの取り組みへの支援、自己研鑽の機会、役割遂行のための環境調整が若手教員の能力形成・向上に資する教育支援であることが示された。

（２）若手教員の能力に関する量的調査

有効回答数が得られた 71 名(有効回答率 40.8%)を分析対象とした。

以下、「　」は NFCSAS の 11 下位尺度、〈　〉は経験学習尺度の下位尺度を示す。

１）若手教員の能力における学習ニーズの傾向：「学生との人間関係づくり」「学生の臨地実習への支援」の低得点群($p<.05$)は高得点群に比べて実習指導に関する学習ニーズが有意に高かった。「教育デザインへの取り組み」の低得点群($p<.05$) は高得点群に比べて研究実践・実習指導・看護実践・組織制度・教育活動に関する学習ニーズが有意に高かった。「学生の主体的学習の促進」の低得点群($p<.05$) は高得点群に比べて実習指導・看護実践に関する学習ニーズが有意に高かった。「学生の学習課題に応じた支援」の低得点群($p<.05$) は高得点群に比べて実

習指導・看護実践・教育活動に関する学習ニーズが有意に高かった。「地域住民の学習ニーズを反映した支援」の低得点群(p<.05) は高得点群に比べて教育活動に関する学習ニーズが有意に高かった。「組織内における役割の遂行」の低得点群(p<.05) は高得点群に比べて実習指導に関する学習ニーズが有意に高かった。「組織メンバー間の良好なコミュニケーション」の低得点群(p<.01) は高得点群に比べて実習指導・看護実践に関する学習ニーズが有意に高かった。

「学生との人間関係づくり」「学生の臨地実習への支援」「教育デザインへの取り組み」「学生の主体的学習の促進」「学生の学習課題に応じた支援」「地域住民の学習ニーズを反映した支援」の低得点群は、研究実践・実習指導・看護実践・組織制度・教育活動に関する学習ニーズが高い傾向にある。また、「組織内における役割の遂行」「組織メンバー間の良好なコミュニケーション」の低得点群は、実習指導・看護実践に関する学習ニーズが高い傾向にある。

２）若手教員の能力における経験学習の傾向：「研究プロセスの遂行」の高得点群(p<.05) は低得点群に比べて〈具体的経験〉〈抽象的概念〉が有意に高かった。「学生との人間関係づくり」の高得点群(p<.05) は低得点群比べて〈具体的経験〉〈内省的観察〉〈抽象的概念〉が有意に高かった。「学生の臨地実習への支援」の高得点群(p<.05) は低得点群に比べて〈具体的経験〉が有意に高かった。「学生の主体的学習の促進」の高得点群(p<.05)は低得点群比べて〈具体的経験〉〈内省的観察〉〈抽象的概念〉が有意に高かった。「組織メンバー間の良好なコミュニケーション」の高得点群(p<.05) は低得点群に比べて〈具体的経験〉〈内省的観察〉が有意に高かった。「学生の学習課題に応じた支援」の高得点群(p<.05) は低得点群に比べて〈具体的経験〉〈抽象的概念〉が有意に高かった。「教育活動の質保証への取り組み」の高得点群(p<.01) は低得点群に比べて〈具体的経験〉〈抽象的概念〉が有意に高かった。

「研究プロセスの遂行」「学生との人間関係づくり」「学生の臨地実習への支援」「学生の主体的学習の促進」「組織メンバー間の良好なコミュニケーション」「学生の学習課題に応じた支援」「教育活動の質保証への取り組み」の高得点群は〈具体的経験〉を重視する傾向にある。「学生との人間関係づくり」「学生の主体的学習の促進」「組織メンバー間の良好なコミュニケーション」の高得点群は〈内省的観察〉を重視する傾向にあり、「研究プロセスの遂行」「学生との人間関係づくり」「学生の主体的学習の促進」「学生の学習課題に応じた支援」「教育活動の質保証への取り組み」の高得点群は〈抽象的概念〉を重視する傾向にある。

３）若手教員の能力における職場学習風土の傾向：「学生の主体的学習の促進」「組織メンバー間の良好なコミュニケーション」の高得点群(p<.10) は低得点群に比べて職場学習風土が有意に高かった。

（３）上位職教員を対象とした若手教員の能力形成・向上に資する教育支援の質的検討：分析の結果、【教育実践を直接学ぶ機会】【授業改善を学ぶ機会】【キャリア開発の支援】【FD に対する意識を高める機会】【研究実践の支援】【心理社会的支援】の 6 カテゴリーが抽出された。上位職教員からは、教育実践力や研究実践力の獲得のための支援、教員としてのキャリア形成・向上のための支援、専門職として能力開発の意識づけとなる場の提供、心理社会的側面に配慮した関わりが若手教員の能力形成・向上に資する教育支援であることが示された。

（４）【若手教員の能力形成・向上支援プログラム（仮称）】を構築するための基礎資料としての評価:考案した【若手教員の能力形成・向上教育支援プログラム（仮称）】の妥当性および適切性を検討した結果、プログラム内容やスケジュールについては良好との評価が得られたが、開催時期、講義時間、講義担当講師について再検討の必要性が示唆された。これらの結果をふまえてプログラムを修正し、グループ・インタビュー参加者 2 名による確認を受けた。これによって、本調査の目的である【若手教員の能力形成・向上支援プログラム（仮称）】構

築のための基礎資料としての評価を得ることができた。

## 引用文献


日本看護系大学協議会（2011）：若手看護学教員のための FD ガイドライン看護学教育の質向上をめざして, 看護学教育質向上委員会平成 23 年度活動報告書.

土肥美子，細田泰子，星和美（2012）：看護系大学に所属する若手教員の学習ニーズとその関連要因, 大阪府立大学看護学部紀要，18(1)，33-44.

土肥美子, 細田泰子（2015）：看護系大学に所属する若手教員が必要とする支援の検討. 日本医学看護学教育学会誌, 24(1), 21-27.

Davis, D.C., Dearman, C., Schwab, C., et al. (1992): Competencies of novice nurse educators, *Journal of Nursing Education*, 31(4), 159-164.

Davis, D., Stullenbarger, E., Dearman, C., et al. (2005): Proposed nurse educator competencies: development and validation of a model, *Nursing Outlook*, 53(4), 206-211.

Doi, Y., Hosoda, Y . (2021): Development and psychometric testing of the nursing faculty competencies self-assessment scale, *Nurse Education Today*, 106,105068.

Holopainen, A., Tossavainen, K., & Karna, L. E. (2008): Substantive theory on commitment to nurse teacherhood. *Nurse Educator Today*, 28(4), 485-493.

伊勢坊綾（2012）：第２章「職場学習風土」と「個人の経験学習」の関係を探究する，中原淳（編），職場学習の探究－企業人の成長を考える実証研究，生産性出版，東京.

Kelly, C.M. (2002): Investing in the future of nursing education, *Nursing Education Perspectives*, 23 (1), 24-29.

木村充，舘野泰一，関根雅泰，中原淳（2011）：職場における経験学習尺度の開発の試み，日本教育工学会研究報告集，(4)，147-152.

Knight, K. (2004): Nursing students in waiting: Who will team them? Nursing Spectrum, http://community. nursing spectrum.com.

Johnsen, K. O., Aasgaard, H. S., Wahl, A. K., & Salminen, L. (2002): Nurse educator competence: a study of Norwegian nurse educators' opinions of the importance and application of different nurse educator competence domains. *Journal of Nursing Education*, 41(7), 295-301.

Guy, J., Taylor, C., Roden, J., et al. (2010): Reframing the Australian nurse teacher competencies: do they reflect the 'REAL' world of nurse teacher practice?, *Nurse Education Today*, 31(3), 231-237.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yoshiko Doi, Yasuko Hosoda |
| ２．発表標題<br>Educational support That contributes to building and enhancing the junior faculty members' competency |
| ３．学会等名<br>The 33rd International Nursing Research Congress 2022 (Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>土肥美子、細田泰子 |
| ２．発表標題<br>看護系大学に所属する若手教員の能力形成・向上に資する教育支援の検討 |
| ３．学会等名<br>第39回日本看護科学学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>土肥美子，細田泰子 |
| ２．発表標題<br>看護系大学に所属する若手教員の看護大学教員能力における学習ニーズの傾向 |
| ３．学会等名<br>第42回日本看護科学学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 細田　泰子<br>(Hosoda Yasuko)<br>(00259194) | 大阪公立大学・大学院看護学研究科　・教授<br>(24405) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |